

『カメラ紀行 秋の宮城路』

昨年の11月初旬に家内と二人で秋の宮城路、松島と秋保温泉^{あきう}への2泊3日の小旅行を試みた。普段の旅行は車での移動が多いが今回は全行程をJRとバスを利用して歩くことを心掛けた。

初日の午後は取りあえず遊覧船で松島湾巡りをすることにした。雲一つない快晴、風もなく海面は鏡のように静かで、島々が点在する景色は素晴らしい。松尾芭蕉が「奥の細道」で“松嶋は扶桑第一の好風にして、凡そ、洞庭・西湖に恥ず”と称賛しているが、320年経った今にいたるまでその景色は変わらないと思われる。



2011年の東日本大地震では松島湾は260以上の島々のお蔭で大きな津波の災害から免れたとのことである。牡蠣^{いかだ}の養殖筏は壊滅的打撃を受けたが、今は湾内の各所で養殖される状況が見られ、災害からの力強い復活を示している。

カメラのレンズを通した松島湾の風景は肉眼で見た景色から一変する。視野が狭くなり、雄大な雰囲気は伝わってこない。何枚かシャッターを切ったが、いずれも満足のいく写真ではない。そういえば松尾芭蕉は「奥の細道」では松島の景色を詠んだ俳句を載せていない。彼は松島の美しさを詳細に描写した後、“自然を造った神のはたらきの見事さを、誰も絵や詩で表現することはとてもできない”と記している。



俳句の門外漢である私は“松島湾の雄大な美しさに圧倒されたのだろう”と想像して、ひとり合点した。

夕食の後、ホテルが主催する「円通院ライトアップ観賞会」に参加した。



円通院は有名な瑞巖寺^{ずいがんじ}（伊達政宗の菩提寺）に隣接しており、伊達光宗（第2代藩主伊達忠宗の次男）の菩提寺で庭の美しさは瑞巖寺より見ごたえのある寺である。円通院のライトアップは有名らしく多くの観光客が訪れている。境内全域にわたり、多彩な人工色で彩られ、今や盛りの紅葉がひとときわ輝いている。現代科学の先端を行くLED照明の色とりどりの輝きは幻想的でさえある。特に池に映し出された紅葉のあでやかさは思わず池に引き込まれそうな感覚になる。

この夜は風がなく池の面が全く静かで動かず、どちらが本物かを区別するのが難しいとさえ思えた。ただ、残念なことに境内では三脚の使用を禁じていたので、手持ちでカメラのシャッターを切るのに苦労した。

翌朝、再び円通院を訪れた。快晴の陽光に映る紅葉は昨夜の夜景とはまた違った趣がある。園内のすべてが静かに、穏やかに秋の移りを



「遠州の庭」：朝



「遠州の庭」：夜

表現している。左の写真は「遠州の庭」の夜景とほぼ同じ場所で撮影した朝の写真である。朝の遠州の庭は多くの樹木に包まれて紅葉は穏やかに光っていた。

もう一つの例は境内の名園「石庭」のライトアップの紅葉と朝日に照らされた石庭の写真である。夜の紅葉は一段と華やかに輝いている。しかし、庭の重要な主役である岩と砂は輝く紅葉に比べて平面的で表情を失い、静かに治まっている。一方、朝日の庭は紅葉の輝きは弱い、岩や落ち葉をちりばめた砂がいきいきとして石庭の素晴らしさを主張している。どちらの景色が良いと思うかは好みの問題といえる。



「石庭」：朝



「石庭」：夜

円通院で朝日に光る紅葉の庭をゆっくりと鑑賞した後、福浦島を散策することにした。福浦島は松島海岸と250米の朱塗りの福浦橋で結ばれた県立自然植物園に指定された樹木に覆われた島である。福浦橋はなぜか「出会い橋」というロマンチックな名前がついている。遊歩道は整備されて歩きやすい。常緑の多い森の中をゆったりと歩き高台の展望台に着く。

展望台から眺める松島湾は正面からの朝日にまぶしく輝き、かすんで見える。

しばらく歩くと少し汗をかくほどの気温となり、一休みして遊歩道から海を眺めると木々の合間からの松島湾の風情もなかなかのものである。今日も波一つなく、静かに朝の陽光を受け止めている海の情景からは東日本大震災の時の荒れ狂う大津波の猛威はとても想像出来ない。



海から、そして島からと松島の秋の風情を心いくまで楽しんだので、昼食に地元の海の幸を堪能した後、仙石線で仙台駅に出る。宮城の紅葉を訪ねる旅なので、仙台の市内観光をスキップして2泊目の宿のある秋保温泉へ向かう。

ホテルの送迎バスに揺られながら車窓からぼんやりと移り行く景色を眺めると大都市の郊外で良くみられるような分譲住宅地が目に見え込んできた。東北第1の都市、杜の都・^{もり}仙台市のベッドタウンであることが良くわかる。

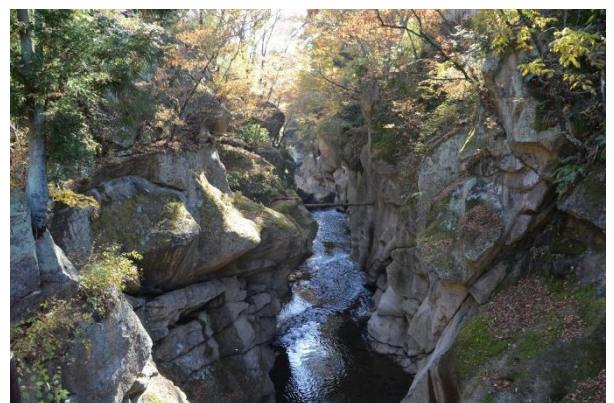
^{あきう}秋保温泉の本通りからやや離れた高台に位置するホテルは松島の海に面した宿とは景観が大きく違い、昨日とは別世界に来た感がある。案内された部屋の窓から山あいにかかって緩やかに流れる夕暮れの雲を新鮮な気持ちで眺めた。

宮城の旅三日目の朝も雲ひとつない快晴の秋日和である。ホテルに荷物を預けて^{らいらいきょう}磊々峡の紅葉を訪ねることにする。

^{らいらいきょう}磊々峡は秋保温泉入口すぐ近くから入る。650米程の起伏の多い自然歩道を深い谷をのぞきながら歩く。^{らいらいきょう}難しい名前の“磊々峡”とは名取川が秋保石の大地を侵食して出来た峡谷で、自然歩道のはるか

下にわずかな水が流れている。峡谷を覗くと川面が白く光っているが音は聞こえない。^{ゆりあげ}名取川は名取市閑上で太平洋にそそいでいるが、東日本大震災では大津波が河口の閑上を逆流して押し寄せて、流域に大惨事をもたらした状況のテレビ報道は記憶に新しい。

この日の峡谷は透き通った朝の陽光に華やかに輝き、影の部分は静かな落ち着いた雰囲気^{ゆりあげ}を醸し出している。朝の遊歩道は陽光を逆に受けて木の葉がまばゆいばかりに光り輝き、

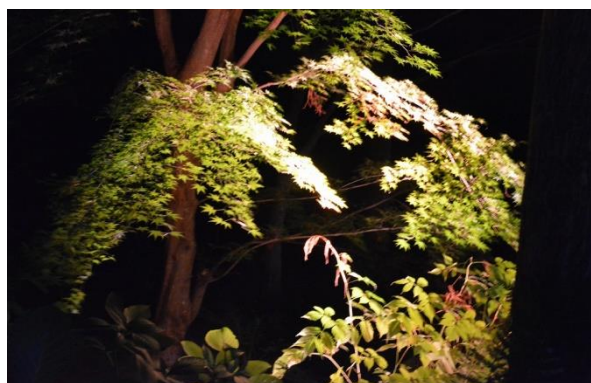


散策する旅人を歓迎してくれる。
川の両岸を覆う自然林の輝きと谷底のくすんだ岩の色との光のコントラストは朝のひんやりとした空気と共にとっても新鮮である。

森の紅葉が朝日に輝く表情をみて、松島の円通院でライトアップに映し出される紅葉の輝きを思い浮かべた。そして、夜と朝の紅葉の輝きは似ているなと思った。



下の写真は光に輝く黄葉である。注釈をつけないと写真の光源のどちらが昼光か夜光かの区別がつかない程である。



夜の光に輝く黄葉（円通院）

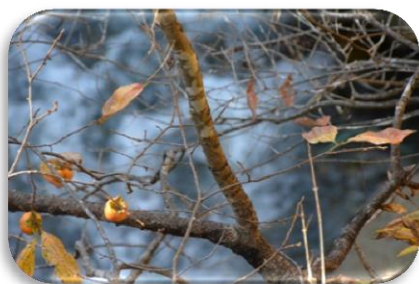


朝日に輝く黄葉（磊々峡）

しかし、よく見ているうちに違いに気が付いた。夜景の黄葉は人工の色が黄葉に反射して輝いている。自然の逆光で見る木々では陽光が黄葉の葉脈を突き抜けて、黄葉の持つ色そのものを輝かせているように感じる。

自然の光、人工の光、いずれの光にしても映し出される映像は見る人の印象を大きく変える。光が醸し出す幻想的な雰囲気感銘を受ける。

^{らいらいきょう}
磊々峡の自然歩道が終わりに近づいた頃、ふとはるか眼下を流れる峡谷に目を向けると、そそり立つ頑丈な岩壁の中腹に一本の木が岩の隙間から横に水平に伸びている。よく見ると枝の先に小粒な柿が3つ4つぶら下がっている。誰も気にしない場所でひっそりと過ぎゆく秋の風情を楽しんでいるかのようであった。



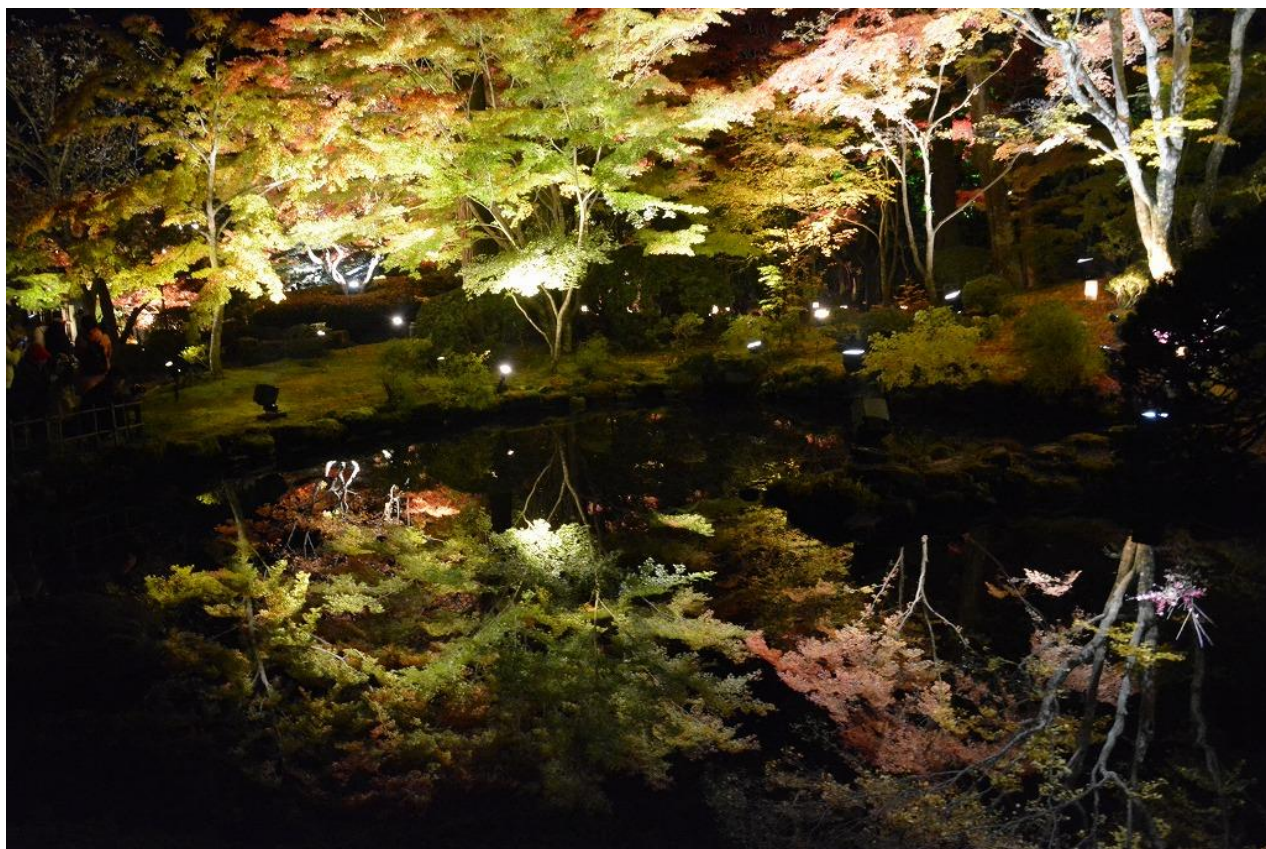
^{らいらいきょう}
磊々峡の人影少ない自然歩道で松島の円通院でのライトアップとは違った自然光のファンタジーを堪能した後、ホテルのバスで仙台駅に出て宮城路の秋に別れを告げた



遊覧船より福浦島（左）を望む



朝日にけむる小島



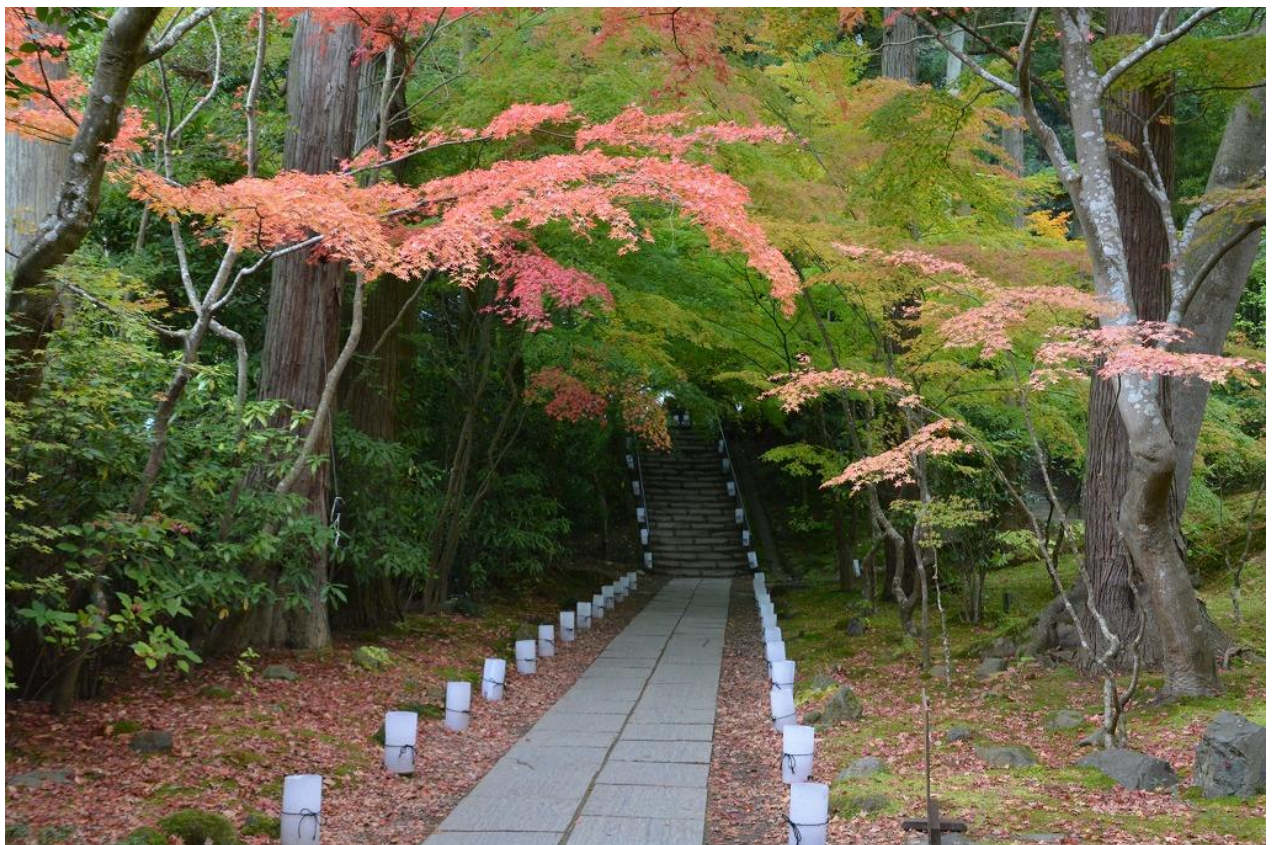
池に映える逆さ紅葉



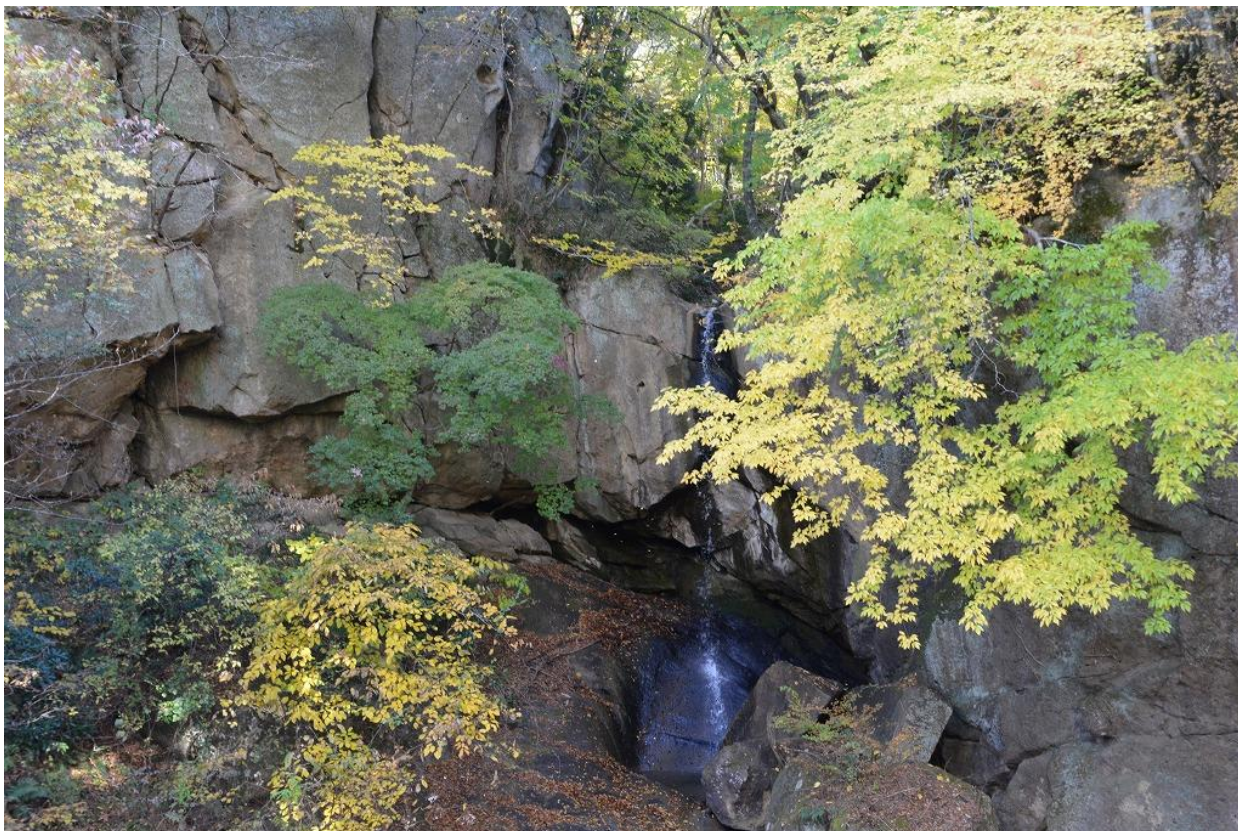
光に浮かぶ三慧殿 (光宗公霊廟)



紅葉にあふれる庭園



さんけいでん
三慧殿への石畳



朝日に光る滝のしぶき (磊々峡^{らいらいきょう})



陽光に輝く谷間の紅葉 (磊々峡^{らいらいきょう})